

おや？この胸のあたりの重みはなんでしょうか。
ある朝起きて、ふと違和感を感じます。
いつも一人で—トレーナーさんを懸想しつつ—触る時とは違い、幾分雑にぐにぐにと揉んだところ、せいぜい僅かにハリがいいようなそうでもないような。
きっと気のせいでしょう、今日も変わらず吉日です。
しかしお昼頃になると違和感が増すばかりです。
痛いわけでも苦しいわけでもないのに、幸せなご飯時もなんだかぽけーとしてしまい、スズカさんに心配されてしまいました。
いつもおかしいけれど今日はいつにも増しておかしいわよ、と。酷くないですか！？
他所様から見ておかしかろうがなんだろうが時は放課後、いざゆけトレーニングです。
いつものようにジャージに着替え、なんかジャージ縮んでないですか。お洗濯失敗……うーむ。
ともかくにもトレーナーさんの元に、今日も今日とて厳しいメニューが並んでいます。
見るだけでスズカさんとの並走に逃げたくなるってどんなボリュームなんでしょうね！でも不思議と完走出来ちゃうんですね。
準備運動もそこそこに、走り出してからはいよいよ胸が張る感じ。風の抵抗……だけでは無さそうですが……
ピリピリした感覚もあって走りも不自然になってしまいます。
当然トレーナーさんがそれを見逃す訳もなく、しっかり見てくれているって嬉しいですね、調子が悪いならという事でお休みになりました。
早めにご飯を食べて寝てしましましょう。そう考えつつ着替えていると、下着が練習前よりなおきつい事に気がつきます。
目を向けると明らかに汗と言いつつ言い切れない程の染みが。恐る恐る外すと……んっ！
僅かな痛痒感に布地が擦れて思わず声が出てしまいます。改めて確認すると胸の先の方から、ぽたりぽたりと雫が垂れていました。え？
「うぎゃはあああああああ！」
思わずあたりに響くような悲鳴を上げてしまいます。
おいどうしたフクキタル、よりによって結構離れていたはずのトレーナーさんの耳に届いたようです。
「ななな、なんでもないです〜！」
必死に誤魔化してどうにか離れてもらいます。こういう時鋭い人なのが痛し痒しですね。でもそういうところ好きですよ。
胸からの汁……母乳とでも言えばいいのでしょうか。当然誰とも関係を持っていない清い体でありますし、混乱は広がるばかりです。
まさか処女懐胎！？神様シラオキ様〜！
混乱にぐるぐる回る頭のまま、とりあえずハンカチを挟み込んで保健室に向かいました。

結論から言うと、原因は不明であるが年頃のウマ娘であれば罹患する可能性のある症状とのことでした。

放って置いても良いが、動き易さなどを考えるとこまめに絞り出してあげたほうが良い、とも。
人のそれとは違い重病などではないようです。
ありがとうございました、保険医に礼を言って自室に戻ります。
ようやく帰り着いた頃には、じつりと制服の上からわかるほどに染みが出来ています。ハンカチでは1-2時間も保たない、その現実にはげんなりしつつも流しへ。少しは絞っとかないとダメですね、そう自嘲して手を当てると——

「ひぎゅ♥」

はっ、はっ、はっ、軽く先端付近に手が掠めるだけで驚くほどの快感が。これは、すごく、危ないの、では。
意を決して下から胸を支えると、それだけで張り詰めた先端から数条の銀糸が跳ねていきます。

ふう、ふう、ぎゅう

溜まりに溜まったものが勢いよく先端から、付け根から、少し外れて輪から出ていきます。

それと同時に電撃のような快感が全身を突き抜けて、視界が白く染まりました。

気がつく胸からポタポタと液体を垂れ流しながら、へたり込んでいました。

なんとか立ち上がり、もう一度——あゝあゝあゝ♥

.....自分で処理するのは不可能だと悟りました。仕方がないのでタオルを胸にかけて寝る事にします。

苦しい、どうして私だけ、重い胸と弱気を抱えて眠りにつきました。

翌朝、夢であれと祈った現実はそのままでした。

べつとりと重くなったタオルと寝巻きを、乱暴に洗濯機に投げ入れます。

日中はハンカチをたっぷりと持ち込み、お昼には部屋に戻って交換しつつ休み毎にお手洗いで交換して過ごしました。

あまりの惨めさに嫌になってきます、これが一体何日、どうかするともっと続くのでしょうか。

なんとか取り繕いつつ、普段から不本意ながら変だと思われるのが功を奏しました、放課後です。

トレーニングが、待っているんですよ.....

それで無くとも栓が存在していないのに、少し大きく動くだけで乳汁は容赦なく刺激と共に漏れ出てきます。

でも、トレーナーさんに迷惑をかけるわけにもいきません。

どうにか着替えて向かいますが、準備運動の前から不調に気づかれてしまいました。

今日も調子は、悪いのか。そう問われているのに、私の口は言葉を発することが出来ませんでした。

ちょっとついてきなさい。そう言われて優しくトレーナー室まで連れてこられました。

落ち着いて話せるようになったら、出来れば話してほしい。辛いならそのまま今日は帰ってもいい。暖かな牛乳と共に声をかけられます。

うう、そう言う所が好きなんですよ！けど、私は、こんな事.....

5分か、10分か、あるいはもっとか。静かな室内に針の音だけが響くなか、私は意を決しました。

「トレーナーさん！お、おお、おっぱいを絞ってください！」

あのいつも冷静なトレーナーさんが目を見開いて口をあぐりとさせています。その様子を見て、遅れて私も自分の発言のおかしさに思い至ります。

かぁーっと顔が真っ赤に染まるのが自分でもわかりました。

「ちちち、違うんですトレーナーさん違うんです！」

ふんぎゃあああああどうすればあああああヘルプミーシラオキーツ！

かくかくしかじかえこえこあざらし。支離滅裂ながらもどうにか事情を説明します。

「状況はわかった、でもそれ友達とかにやって貰った方がいいんじゃないか」

うぐ、ど正論で返してきますねトレーナーさんは。だけど私にだってちっぽけながらあなたが育ててくれたプライドなり羞恥心なりがあります。

なによりも「トレーナーさんで、トレーナーさんだから、いいんです」。

渋々といった程ですが、トレーナーさんも覚悟を決めてくれたようです。

流しに並んで立ち、上を脱ぎます。

後ろからトレーナーさんの手が脇を通して伸びてきましたが、心なしか震えているようです。

なんだかその姿に安堵を覚え、自分の手を外から被せ、誘導します。

重なり合った手が胸に触れました。くすぐった感触に、ぶるりと身を震わせませす。

で、デハオネガイシマス.....

あ、ああ。

互いに震えた声で意思を交わし、いざ。

ぎゅう

ひぐううううう♥

胸に力が入った瞬間、溜まっていたモヤモヤが一斉に母乳と共に噴き出していきました。

流れる快樂に思わず脚から力が抜けたところを、後ろから抱えられます。
その拍子に力が入った腕により、更に勢いよく噴き出す母乳。あっという間に私は、高みへと投げ出される事になりました。

ふうっ、んっ♥、ふうっ

しばらくして正気を取り戻すと、なるほど確かに大分胸も体も軽くなった気がします。

しかし依然として奥にはジクジクとした熱が残っています。

「トレーナーさん、もっと、もっとやってください♥」

倒れると危ないからと、椅子に座って絞ることとなりました。

それに伴い、流しでは無く机の上にポウルを置いてすることになりました。

びゅー♥びゅー♥

白濁液が容器に溜まっていくのをとろんとした瞳でぼんやりと眺めます。

捨てちゃうの、かな。なんだか勿体ないな、と。

しばらくの後、母乳はついぞ出なくなりました。

ありがとうございます。振り向いてお礼を言うと、トレーナーさんの股間のあたりが膨らんでいるのが妙にはっきりと感じられました。

ともかく、トレーニングに戻ります。びっくりするほど体は爽快に動き、スズカさんやリョテイさん、タイキシャトルさんを薙ぎ倒したりしました。

それでも夜になるとまた溜まってくるようです。胸は重く張り詰め、このままでは熟睡もままなりません。

そう、だからこれは仕方がない、仕方がないんです。

「トレーナーさん、またおっぱいを絞ってくださいませんか♥」

はぎ……♥ふぎゅう♥いいいっ♥ん——お`お`お`お`♥

朝、昨晚からの快樂と起きていない灰色の脳細胞が導き出した神託に従い、なんとかトレーナーさんが起きる前に自分で少し絞ってみます。

そしてコップに移し替え、こう言うんです。

「おはようございます、トレーナーさん♥ミルク、飲みませんか♥♥」

あっ♥はむ……っ♥やあ、ふにやああ♥♥♥

ほーら、泣き止んでください。

ママのおっぱいですよ～。

むふふ。あなたの分は夜まで待ってくださいね♥

マチカネフクキタルの朝は早い。溜まりに溜まった胸の中身を絞り出す必要があるからだ。

やんごとなき事情により、私はトレーナーさんと褥を共にしています、これは仕方がない、仕方がないことなんです。

「おはようございます。今日もその～、お願いします！」

慣れた手つきで寝巻きを脱ぎ、下着を外していきます。寝る前に挟んでいたシートはそろそろ限界いっぱいといったところ。絞り切っても数時間しか保たないので大変です。

べちゃりとゴミ箱にシートを落としトレーナーさんが幾分荒い息でそれを眺める事に奇妙な愉悅を覚えつつ—椅子に座ってその時を待ちます。

すっ、慣れた手つきで後ろから腕が差し込まれます。初めての時と同じ様に、その外から私の手を被せます。そうしてぎゅうと小指から順に力を加えていきます。

びゅ♥びゅう♥びゅる♥

「~~~~~♥」

思わずのけぞり、声にならない悲鳴を上げてしまいます。

幾分慣れたとは言え、出口を塞ぎかねないほど濃縮された一番搾りを出すときは、自分で体を抑えることができません。

しかしトレーナーさんの腕は止まりません。容赦なくボウルに絞り出されていきます。

「トレーナッさあ`あ`あ`♥ストップ♥休けえう`う`う`♥」

出し切らないと困るのは自分だと言うのに、口は嫌々と駄々をこねます。そんな私を知ってか知らずか容赦のない搾乳で、どぶどぶとボウルは満たされていきます。

朝から酷い目に遭いました♥大凶です♥

日々増量と濃縮が繰り返され、今や母乳はドトウが将来出す事になるであろうそれを超える程に濃厚となっています。

こんなものを流して捨ててしまっっては詰まるやもしれません。ぐずぐずの脳がそんな神託を受けます。

ですので仕方なく、仕方なく飲む事にします。センキューシラオキ

ごくり、甘く濃厚な痺れが体を突き抜けてどンドン溜まっていきます。胃に、その下に、下に。

浮ついた意識のままにコップに移したそれをトレーナーさんにも渡します。

「ミルク、いかがですか♥」

倒錯したシチュエーションに、胸の根本がずくりと痛むように疼きます。またすぐに、溜まっちゃうんでしょね♥

むふふ。不思議ですね、トレーナーさんのズボンがパンパンになっています。

ああ、でももう時間がありません。手早く着替えて部屋を出ます。

「お昼も、お願いしますね！」

マチカネフクキタルの昼は忙しい。午後に備えるべく短時間のうちに張り詰めた胸をどうにかする必要があるからだ。

これは放課まで授業を集中して受けるために仕方がない、仕方がない事なんです。

急ぎ食堂でお昼を、今の私はオグリキャップさんにも負けない速度で食べる自信があります、済ませてトレーナー室へと向かいます。

失礼シマス！おや、まだいらっしやらない様子……

もうすっかり慣れてしまいました、勝手知ったる室内で容器を机に準備し終え、ソファに寝そべります。

早くきてくれないでしょうか。仰向けになり、手持ち無沙汰な待ち時間。

んっ♥

小山が自重で形を崩し、先端から飽和した乳汁が染み出します。

溜息と共に、胸に当てていたパッドを抜き取り、流石にその辺りに捨てるのも気が引けるのでお手洗いの屑入れに持っていきます。

扉を開けるとなんとも言えない消臭剤の香り。しかし混ざって独特の臭気を感じます。

ずくと下腹が、胸が疼きだし、どちらかともなくじわりと湿り気を帯びていきます。

屑入れの蓋を開けると、果たしてそこにはトレーナーさんが処理した後が残っていました。

きっと私が来る事もあって室内に残滓を残さないように気を使ってくれたのでしょうか。しかし、気づいてしまえばそれは。

ふう、ふう、思わずそれを手に取ります。まだ僅かにぶよぶよとした塊を残す紙片を鼻先に近づけ、思い切り息を――

……立ったまま一瞬気をやっちゃってしまっていたようです。手に持ったままのそれをパッドと共にしっかりと屑籠に入れ、蓋をします。

ああ、そうだ、絞って貰わないとでした。

床に染みを作りながら、ふらふらと机に向かうと丁度トレーナーさんが戻ってくるころでした。

あは、おかえりなさい。また、お願いします♥

びゅる、びゅうびゅう、びゅびゅう

「ん`♥っふ、ふうう♥ぎも、ち……です♥」

手だけは添えて、後は脱力して全てを任せます。胸と心が軽くなると同時に、同じだけ根を張ったように下腹が重たくなっていきました。

トレーナーさんからもお手洗いで嗅いだもののより鮮烈なものが漂ってきます。

.....数分もすると、幾ら絞っても甘い快感以外は出て来なくなります。名残惜しいですがお昼はここま
で。うっかり詰まっではいけないので、二人で仕方なく絞り出した母乳を飲み、服を着直します。

でもこれはもう、使えませんか♥

重く糸を引くショーツを脱ぎ、着替えます。脱いだ方は見せつけるように軽く畳み、脇に置きます。

「すみません、また夕方来た時に持って帰ります。変な事に使っちゃ嫌ですからね♥」

むふふ、きっとこれでハッピーカムカム。

それではまた、放課後に！

マチカネフクキタルの下校は早い。速やかに再び溜まった胸をスッキリさせ、トレーニングを行わ
なければならぬためだ。

制服の上を脱ぎ、そわそわと机の前で待機します。これはトレーニングの為、仕方がない事なん
です。

ん..... ♥

慣れた手つきで、とはいえどこか乱暴に、トレーナーさんの手によってブラを脱がされます。

以前より一回り大きく張り詰めた胸がぷるりと溢れ、つられて先端から乳汁を僅かに噴き出しま
す。

慣れたとはいえ、先端だけではなく根本や輪の近くからも銀糸が出ている様は、やはり不思議な
気分になります。

そのまま手が回され、下から掬うように支えられました。私もそれを、外から手を合わせます。

二人の共同作業の始まりです。

「ふう、ふう、んんっ..... ♥もっと、最後まで♥お願いしまっ♥ぐうう♥♥」

流石に一日で回数を重ねると、体も慣れてくるもので、比較的ゆったりと快感に浸る事ができます。

びゅるびゅる♥びゅびゅー♥

とろんとした悦楽を享受しながら、数分で搾乳は終わりました。

やはり溜まったそれを飲み合うと、トレーナーさんは元気になるようです。

その事に喜びを感じながら、着替えてトレーニングに向かったのです。

ターフに出るとそこは現役競技者ウマ娘とその担当に幾つもの賞を取らせたトレーナー。妥協も
手抜きもありません。

もう少し、壺を信じるとかトレーニングを緩めて貰えるとフクタスカルなんです..... ふんにや
ろ！

でも、こうして過ごすのも楽しいんです。いきますよトレーナーさん！目を離しちゃ嫌ですから
ね〜。

いや〜今日も大変でした。でもスズカさんとの併せは楽しかったですね、むふふ。

ふんにやかハッピーと着替えて、お昼に置いていったままの下着を回収します。

くん、くん..... ♥

石鹸の匂いと合わせて、隠しきれない膣えた匂いが鼻をつんざきます。私で興奮してくれている、その事
実だけで歓喜の念が湧き上がってきます。

汗以外のものでもショーツが湿り気を増していくのが分かりました。

ともかくミーティングを終え、しばし別れの時間。

「今晚もまた、お願いしますね♥」

マチカネフクキタルの夜は遅い。熟睡して明日に備える為、最後まで胸を絞り切らないといけないから
だ。

だからこうするのも、仕方がない事なんです。

常のように胸を絞り、絞ってもらった後。手ではもう出てこない奥底にまだ幾分か
の重みを感じます。

朝まで時間が長いことを考えると、しっかりと全て出し切る事は必須でしょう。

なので、自分一人では絶対にやれない提案をします。

「直接吸って、貰えませんか♥」

熱に浮かされるまま行った提案は、初めてではありませんでした。
しかしやはりと言うか向かい合う事になるのでとても恥ずかしいです。
トレーナーさんの方も顔を下に向けて、でも視線はチラチラと胸を向いてますね、嬉しいです。
「ふんにゃろ、女の子に恥をかかせちゃ嫌ですよ」

軽口を叩くと、いよいよ覚悟が決まったのかその口が胸に届きます。

かぶり♥

ぞくぞくぞく。快感以上に、凄まじい多幸感と痺れが全身を駆け巡ります。

男女の営みのそれとは違い、ただただ中身を吸う為だけの行い。

かわいい、ですね。赤ちゃんができたならこんな感じなのでしょうか。私と.....さんの赤ちゃん。

そんな風に考えていると一層下腹は熱くなり、流れ出る粘液は白く濁っていきました。

もどかしさを誤魔化すべく、両手でトレーナーさんの頭をかき抱きます。

ちゅぱ♥くぱ♥っぱ♥じゅる♥

私の荒い息と胸を吸われる音だけが部屋に響き渡ります。一体どれだけそれが続いていたのか、状況は変化を見せます。

胸の奥の方から、少しずつ塊のような感覚が進んできました。ゆっくり、確実に、乳腺を広げるように乱暴に。

次第にそれは、先端に集まってきます。ああ、だめです、動かなくなっていました。

堰き止められたのか、母乳もわずかしか染み出して来ず、その事にトレーナーさんは怒ってしまったようです。

ぐに、乱暴に根本から腕に力を込め、カー杯に吸い出そうとします。

「ひゃ♥ひゃめっ、くださあ♥♥痛っ、痛い♥にゃああ`あ`あ`♥」

詰まっていた塊がとうとう音を上げ、先の先まで到着します。じゅぽん。

「~~~~~ツツツ♥♥♥♥」

半ば固形のようにになっていた、奥で熟成された部分が抜け出します。

どこに溜まっていたのか、はたまたまった今作られているのか。奥からはまた湧き出すように母乳が溢れてきます。

ああ、もう片方もやって貰わないと..... ♥

両胸ともあらかたは片付きましたが、そろそろトレーナーさんのお腹もいっぱいようです。

仕方ありません、別の方法を考えるとしましょう。

「トレーナーさんもここ、苦しいですよ。私に任せて貰えませんか」

曖昧な態度を、肯定と受け取ります。少し抵抗されたものの、ズボンごと引き摺り下ろして座って貰いました。

そうして準備ができたところに、膝立ちで向き合います。

「こうして胸でやったら、私は絞れますしトレーナーさんは楽になるしお互いハッピーだと思いませんか♥」

今度は答えは聞きません。んんっ♥胸から母乳を絞り出します。

ほんのりと粘り気のあるそれを、たっぷりとかけていきます。しゅこしゅこ、十分すぎるほどに潤滑は得られました。

残念ながら包み込むほどのサイズはないので、両腕を背中に回して抱きつくような形になります。

そのまま上下ににゅる、にゅる。

あっ♥これ、すごっ♥♥いいです..... ツ♥

流れ落ちるたびに、新たな母乳が漏れ出して、母乳が母乳を洗い流していきます。

にちや、にちや、ずりゅ、ずりゅ

先端が竿の先端で弾かれた時など、互いに強い刺激が走り飽きることもありません。

いつのまにかトレーナーさんにも背中に手を回され、歪に抱き合う形となっていました。こういうのも悪くないですね！

「あっ♥ふう、ふっ♥んんっ♥」

しばらくそうして互いの体液を絡み合わせていると、熱と圧迫感が急激に高まりビクビクと強いノックを胸に受けます。

きっともうすぐです。腕に少しばかり力を込めると胸は潰れより一層密着し、隙間の一切を埋め尽くします。

「いつでもカムカム、ですよ♥」

ずりゅ、ぐりゅ、ぐぢゅ

「くそっ、出すぞ！」

トレーナーさんはそれだけ言うと、痛いほど指先に力を込めて私を道具の様に抱き寄せました。悪い人、ですね。

どぶっ！どくんっ！どくん！どびゅう、びゆる、びゆる

恐らく今日2回目であろうそれは、十数秒は続いたでしょうか、とても長く暖かいものでした。

胸の内は流石にもう空っぽになりました。けれど胸に乗った白濁はそれを上回る存在感。

べちゃあ♥

体を離すと、胸中にべったりとまるでゼリーの様になった白濁が乗っています。

未練たらしく太い糸が一本、トレーナーさんとも繋がったままです。

その光景に興奮してくれたのか、トレーナーさんのものは糸を断ち切るように力強い咆哮を上げました。

今日はいっぱいお世話して貰いましたし、次は私の番ですね。

そのままベッドに仰向けになり、手を伸ばします。

「お待ちかね、貴方の側に、福ですよ♥」

あっ♥んんっ♥やあっ♥♥

これじゃほんとに…… ツ♥おっぱい出るよう、にいい♥なっちゃいますよ♥♥ふにゃああ`あ`♥

ああ、一体いつになったらこの母乳は止まってくれるんでしょうか。毎日こんなことが続くななんて本当に、不幸で、ハッピーです♥